



山形タント節



習志野市民まつり「きらっと」

「とんかつ屋」女将の「とんかつ」半世「気」



母の手紙・母の教え

4の4

寿々本 鈴木 加代子



昭和42年2月29日、津田沼に「とんかつ」店を出しました。それから笑いと涙の50年。

「三つ子の魂、百まで」

これが口癖だった私の母。

夫は大事故、入院、そしてお店の再開と多忙だった大変な時期を、今は亡き母はしつかり支えてくれました。

当時8か月だった長女京（みやこ）が21歳になったとき、母は彼女にこんな手紙をくれました。

おばあちゃんからの手紙

京（みやこ）、「アンアン」みたよ。素敵じゃない。

大西さんって、14ページの写真のまん中にいる人？いい先輩があつて幸せじゃないの。

でも、おとなしいあんたが、カメラマンだのいろいろの人の居る中へ出られてよかったわネー。

変身体験の本音の対談、なかなか皆正直で、思うことを言っていて愉快だわ。学生さんの中で、京が一番いいと思う。欲目かな？これからも勉強していいデザインになってよ。

だんだん度胸も出てくる。

その道に入ったからには眼を肥やして友達とも手をつなぎ、まあまあ、あつぱれだと自慢できるようになってください。

私は学生時代、こんな漢詩が好きだった。

「青年再来らず 一日再晨（朝）なり

難し時に及んで勉勵すべし

歳月 人を待たず」

若いときは一日一日を大切に。知識を吸収することは、ちっとも重荷にならない。若いときに覚えたことは一生忘れないからね。

習字を習っているんだネ。習字も結構だよ。「悪筆は一生の損」。

まあ、よく稽古するんだわネ。字も覚えられるし、筆使いが楽になるもの。

ちてきました。

新年会、忘年会はもとより、お客様で大にぎわい。

私は得意の踊りで宴を盛り上げるとチップをはずんでくださる方も。

「あつちこつち、女将は気を使うね」「私のお役目ですよ」

と云つてこなしました。

職人気質で無口、お地藏さんみたいなな夫を助けながら、そうして私は店を切り盛りしてきました。

京へ

ババ

三月十八日
裕子も晶も自分の好きな方面に進めばいいと思うよ。

学問的な教えをしてくれた人、母。明治は遠くになりけり。

ケガから復帰した夫との二人三脚が続く中、時代は変わり新しくできた工業団地に町の工場は次つぎと移って行きます。

その頃はお客さまの口コミで新しい企業の宴会も多くなり、店も活気に満

おばあちゃんから優しく厳しい心のこもった長い手紙をもらった長女京は今、服飾デザイナーとして活躍しています。いつも和服の私が洋服を着るときは彼女の作品。

長男品は日本料理を修業。寿々本の後継者として、地域の方々に愛される店をつくつてくれています。

(続く)

(注) 裕子は二女、晶は長男